

## 『撰集抄』の成立過程

渡邊 信和

—

『撰集抄』が、特定の個人によって撰述されたと考えられているのは、序・跋を持った整った説話集であることによるのであろう。

撰者は、序文<sup>(1)</sup>に、

……新旧の賢跡を撰求けることの業を書集め、撰集抄と名て、座の右に置いて、一筋に知識に憑申むと也。

とし、跋文に、

……遠く伝聞、近く耳にふれし昔賢き跡、まのあたり、見侍し中にもいみじき人々を書のせて、且は彼人々のことくならんと欣求し、且は閑居の友とせんとて、九卷に注載せ侍り。

とされているように、自らの閑居の友とし、いみじき人々を善知識とし

『撰集抄』の成立過程

て、自らの道心を堅固ならしめんとする為に撰述したとしている。ちょうど『発心集』が、まず鴨長明によって自らのために撰述されたのと同様に、特定の個人によって『撰集抄』が撰述されたと考えられるのである。

しかし、『撰集抄』が、跋文に、

千時寿永二年むつきの下の弓はり、讃洲善通寺の方丈のいほにして  
しるしおほりぬ。

とし、巻第三第一「見仏上人」中に、

我をば西行となん申すに侍り

と名告っているのは、いずれも『撰集抄』を西行撰述の作品とする虚構の上に成り立っているのであって、撰者の問題は簡単には、解決できないようである。

犬井善寿氏は、『撰集抄』の構成に「述主」を設定して、撰者と弁別

しておられるが、虚構の影に隠れた撰者について考える場合、各説話中に、あるいは説話についての感想をのべ、自分の過去を語る「述主」について検討することは、一つの有効な方法であらう。

二

『撰集抄』の各説話を述主とのかかわりにおいて分類すると以下のようである。

- (1) 述主がその説話の事象を目撃して、体験した事として記すもの。  
 卷第一・(第)四(話)、五、六、七、卷第三・一、二、五、九、卷第四・三、六、七、卷第五・六、七、一一、一二、一三、一四、一五、卷第六・二、四、五、八、一一、一二、卷第七・一〇、一三、一四、卷第九・七、八、九、一〇、一一。

- (2) 述主が伝聞し、あるいは書物で読んだ説話を記すもの。a、述主が直接にその事象のあった地に足を運んで、その地に伝わる説話を聞き、記したとするもの。卷第二・二六(卷第八・二八)<sup>5)</sup>。b、述主が書物によってその事象を知り、それを再録したとするもの。卷第一・三(江帥の「往生伝」<sup>6)</sup>)、八、卷第二・一、卷第九・六(以上三話「遊心集」卷第五・九(二伝)とのみある)、卷第六・九(漢の「明記」)、一〇(「拾遺集」)、卷第七・三(「拾遺伝」)、四(「誓勸抄」)、卷第九・三(「旧跡」)  
 c、右のa、b以外の伝聞によって記したと思われるもの。七七話。

このうち、(2)のbに挙げた典拠を示した書承についての述主の姿勢は、(2)全体の説話と述主の関わり方を示していると思われる。即ち、卷第一第三「無縁僧帷返」の説話に対する述主の感想(論評)を記した部分に、

此事、江帥の往生伝に注載給へり。み捨かたきに、たくみの詞を、いやしけに引なし侍る也。見およはさるには非ず。彼記には平の京東山のほとりにて往生の素懐を遂ぬと侍るをみるに、すゝろに泪落て侍りき。

としていたり、卷第一第八「行賀切耳」でも同様に、

此事、遊心集にかたはかりのせ侍りしやらん。結縁もあらまほしくて、書載するに侍り。たくみのこと葉をいやしきさまにひきなしぬる憚り一方ならず侍れども、もらしてやみなん事のあたらしさに、又筆を染ぬる也。

とするのに見られるように、前述の『遊心集』等の書物は、述主と受手とが共に読んでいる書物と考えられ、それらに載せられた説話は原則としてこれを採らないとする方針がうかがわれる。ちようど「閑居友」<sup>7)</sup>が、『発心集』を引き合いに出して、

この書には伝にのれる人をばいるゝことなし。

としているのを受けたかと思われるのである。『閑居友』はその理由として、

かつはかたぐはぐかりも侍り。また世の中のならひは、わづかに

おのれが狭く浅くものをみたるまゝに、これはそれがしが記せるものゝ中にありし事ぞかしなどよにもたやすげにいふ人もあるべし。またもとより筆をとりてものを記せるものゝ心ざしは、我この事を記しとゞめずは、後の世の人いかでかこれをするべき、と思よりはじまれるわざなるべし。

としているが、『撰集抄』の述主も同様の理由によつたと考えてよいだらう。『撰集抄』では、「事のみすごしがたさに」転載する場合にも、「たくみの詞」を「いやしげに引なし」たことわっているが、そこには、述主の自分の言葉で説話を語らうとする姿勢もうかがわれるのである。

(2)のaに分類した説話も、述主がわざわざその地に行つて、伝承されている説話を聞いて記録したとうかがわせる書きぶりから、前述と同じく自分の言葉で説話を語らうとするものであると言えよう。

(2)のcでも、巻第三第八「正直房被人仕」は、保延二年(一一三六)に美濃国で往生を遂げた正直房と呼ばれた人物の事蹟を記しているのだが、その論評に、

此事聞侍りしに、余に貴く侍りしかは、彼国に罷下て、移し留奉る姿をも、拝見し侍らんと思給て、すてに、備前のほそ谷川まで出侍りしか、心地の悩しくて、行きさきの道もいふせく思ひやられ侍りしかは、そこより思返て、きひつ宮に帰り侍りき。

と述懐するように、その事象を伝聞して、事件のあった地に足を運ぼう

とする姿勢が見られる。自らの確認に基づいて、自らの言葉で語らうとする為の努力と思われるのである。

こうした傾向は、自らの目撃した事象として語られる(1)の説話では当然の事であるが、(2)についてもa、bはもちろんcを含めた全体に及ぶものと考えてよいだらう。特に各説話の後に付せられた教理を引いた解釈や、説話に対する論評は、まさしく述主の意識を反映したものであると読みとれるのであつて、そこにまま見られる自らの過去に対する述懐も、述主のそれであるとしてよい。

むろん、『撰集抄』が「閑居友」をはじめとするいくつかの先行文献から説話を転載し、あるいはその思想を引き継いでいることは、先学の御指摘の通りであるし、各説話の後に付せられた教理を引いた解釈、説話に対する論評などもその中に含まれていることは知られている。しかし、虚構された『撰集抄』は、述主の意識としてそれらを表出し、述主の見聞として説話を語っているのである。

### 三

では、述主の行動範囲を説話、論評、述懐などから検してみよう。

『撰集抄』にみられる述主の行動のうち、年次のわかるものを表にすると以下のようである。

年次	No.	事	象 (巻一話)
出家前	1		仙洞に勤仕していた。(五一〇、六一三、六一五)
2			青蓮院真誓の登山に供奉。(二一二)
3 出家 長承四年 (一一三五)	3	妻子をふり捨てて出家。 (六一三、七一〇)	
4	4	吉野に住む。保延三(一一三七)年まで。(七一〇)	
5	5		三滝の聖人観空の庵室を訪れる。(六一二)
6	6		長谷寺に参詣し、別れた妻に遇う。(九一〇)
7 回国修行	7		回国修行した。(二一四)
8 久安元年 待賢門院の中納言局の出家を	8		
(一一四五)			聞き、小倉山麓を訪ねる。(五一六)
久安四年 (一一四八)	9	中納言局の死にあう。(五一六)	
保元元年 (一一五六)	10	秋七月、都で保元の乱を目撃し、すぐに都を離れる。(二一七)	
保元二年 (一一五七)	11		これより以前に、西山に閑居する僧のことを徳大寺実能に話す。(五一七)
12	12		これより以後に、陸奥国しのぶの郡くつの松原に、権小僧都覚英の跡を訪ねる。(九一一)
永暦二年 (一一六一)	13	信濃へ趣く。そこから高野へ向う。(六一八)	
仁安元年	14		仁安年中に西国へ趣き、讚

(一一六)		岐国みみ坂の社にしばらく住む。(一一七)
仁安四年 (一一六九)		離れるとき、白峯に崇徳院の墓を訪ねる。(一一七)
治承元年 (一一七七)	15	治承年中に、常陸国鹿嶋に参詣。(七一三)
治承二年 (一一七八)	16	長月、或聖を伴って西国に行き、江口に立寄る。(五一一一)
	一)	足をのばして、宇佐、金かともさきまで行く。(五一三)
	17	同じ頃、奈良京を巡礼し、春日に参詣。(五一四)
	18	東大寺に俊恵を訪ね、讃岐、難波での詠歌を披露。(五一四)

治承五年 (一一八二)	19	同じ頃、高野の奥に住み、骨人を作る。(五一一五)
治承元年 (一一八二)	20	華洛に出て、帰路徳大寺実能、伏見中納言師仲を訪ねる。(五一一五)
治承元年 (一一八二)	21	八月初、西山の西住と難波に行く。(六一四)
治承二年 (一一八三)	22	長月二十日、江口を通る。(九一八)
治承二年 (一一八三)	23	西住の病を聞き、西住を訪ねその死を看とる。(六一五)
治承二年 (一一八三)	24	むつきの下の弓はりに、讃岐国善通寺で闍筆。(跋)

その他に年次のわからないものとして、

(東国関係)

25 以往、あつまちの方へさそらへまかり侍りしに、宇津の山辺の桜み  
過しかたく覚て、奥深尋入て侍りしに、……

思はさるに陸国にさそらへ罷て久侍りて、上りさまには、異道より  
つたひ侍りしかは、……(一一五)

26 過にし比、越後国したの上村と云方にまかり侍りたりしに、……

(一一六)

27 過ぬる比、陸奥国ひらいつみの郡、捌と云里に、しはしすみ侍りし  
時、……(二一六)

28 以往、或聖と伴ひ侍りて、こし路の方へ越侍りき。能登国いなやつ  
のへこほりのうちに、……

歸さには見え給はさりしかは、わさと四日の道をへて松嶋へ尋参  
て、彼寺に二月はかり住て侍りき。(三一)

29 過にし比、こしの方へ罷侍しに、舟さか河を舟にてなんわたり侍り  
しに、……(四一六)

30 さいつころ、武蔵野を過侍しに、……(六一一)

(西国関係)

31 過にし比、筑前国へさそらへ罷りて侍りしに、……(二二二)

32 以往、丹波国大江山いく野の里を過侍りしに、……(三一五)

33 此事聞侍りしに、余に貴く侍りしかは、彼国へ美濃に罷下て、移  
し留奉る姿をも、拜見し侍らんと思給て、すてに、備前のほそ谷川

まで出侍りしか、心地の悩しくて、行さきの道もいふせく思ひやら

れ侍りしかは、そこより思返て、きひつ宮に帰り侍りき。(三一八)

34 以往、淡国にしはらく俳個し侍りし事ありしかは、其国見ありき侍  
りしに、藤野の浦と云所侍り。(四一七)

(紀州関係)

35 過にしころ、紀伊国の方にまかりて侍りしに、かつらき山の麓に、  
……(三一九)

36 過にし比、紀伊国ゆらのみさきを過侍りしに、……

扱、我にともなふへしとて、それより具足して、高野粉川まいりあ  
りきて、終に都にのほりて、西仙聖人の庵に引付……(四一三)

(畿内関係)

37 過にしころ、摂津の国住よしの社の社司のもとに、仏事行事侍り  
き。折節、其あたりにふればひ侍りしかは、結縁もあらまほしくおほ  
えて、のそみ侍しに、……(三一)

38 またのとし、東大寺にまうて侍りし次に、……(四一六)

39 過ぬる比、三条のおうきおと、北の御方の第三年の御仏事いとなみ  
給しに、御導師は、三輪の明遍とかや聞え給し若学生と申侍りしか

は、心とむへき一ふしもきかまほしくて、其庭に望て侍しに、……  
(九一)

右に示したように年次不明のものも多く、わかりにくいのだが、可能  
性のあるものはまとめるようにして述主の行動を整理すると、まず東国

方面は少なくとも四度行っていることになる。一回は、13の永暦二年(一一六一)で、その折は信濃へ行き、往生人に逢って、その骨を拾って高野に行ったとしている。今一回は、15の治承年中の東国行で、常陸国鹿嶋を参詣し、甲斐から浅間、木曾と通って越中へぬけている。あるいは30の武蔵野で郁芳門院の侍であった僧に遇ったのもこの時かと思われる。他の二回は年次不明のもので、前述のいずれの旅よりも早いか、その間に入るのか、後のものか判別はできないが、28のある聖を伴って、越前から能登、奥州松島まで足をのびた旅と、25の宇津谷峠から関東へ、さらに27の奥州平泉へと向った旅である。28の北陸行には26の越後、29の舟さか河が含まれると思われ、25の東海道の旅は12が含まれるかと思われるのである。25の旅は帰路東海道を通っていないはずなので、13の信濃へ行ったのが、それにあたるとできない事もないが、それにして三回の東国行なる。

西国の旅も、14の仁安の頃の讃岐国みみ坂の社にしばらく滞在し、帰りに白峯へ行った四国行と、16の治承二年の江口、安芸、宇佐から金かみさきまでの修行の旅、32の丹波行、24の寿永二年に讃岐の善通寺に至るまでの旅の四回を数えられる。14か24の四国行のいずれか、おそらくは24の方に33の備前国ほそ谷川まで来た旅が入り、16には31の筑前での見聞が含まれることになる。34の淡路国の俳回もいずれかの折の事であろう。

畿内の行動は、例えば紀州まで含めても、寿永元年の21難波、22江

口から23一度都へ戻り高野へ向ったり、35の紀伊国かつらぎ山、36ゆらのみさき、高野、粉川から都へ出たとしてたり、複雑な上、実際の行程でも、東国、西国と異なっている短いためその回数を数えることには、あまり意味がないと思われる。

同じように旅僧西行をあつかった『西行物語』は、(1)出家前。(2)出家。

(3)吉野山。(この中に紀伊国千里の浜を通って熊野、那智大峯が含まれる。)(4)住吉、難波から都。(5)伊勢。(6)東国。(遠江国天竜の渡、小夜の中山、宇津山、相模国大庭、武蔵野、陸奥国白河、信夫郡、衣川、平泉、美濃国。)(7)都。(8)四国。(第一次。)(9)小倉山。(待賢門院中納言局。)(10)天王寺。(途次江口。)(11)仁和寺。(12)天王寺。(13)四国。(第二次、讃岐国松山の津、白峯。)(14)都。(15)高野。(16)東山。となっていて、東国一回、西国二回とよく整理されている。物語という首尾一貫性を求められるものと、雑纂が許される説話集の違い以上に、西行の虚像である理想化された遁世者、回国漂泊の歌僧を描いている点で『西行物語』が数段優れている。『撰集抄』の述主の行動は繁雑で未整理であり、よしんばいずれもが西行の史実の行動とは異なっているにしても、少なくとも西行と名告る述主の行動はそれなりの統一がとれていなくては、虚構した意味がないのではないか。

#### 四

視点をかえて、述主が挙げている一つ一つの地名を検すると、その意識に二様あることがわかる。述主に対する受手の問題とも言えるのだが、一つは述主が受手もよく知っていると思っている地名、いま一つは、少なくとも述主は、受手にとって未知であると意識している地名である。後者は説話中で「……と云」と表現されている。

越後国したのうへむら(一一六)、相模国土肥(四一一)、信濃国木曾(五一二)、近江国田上(二二三)、志賀(四一一)、山城国雲居寺(三一七)、大原(四一五)、小野(九一三)、大和国多武峰(九一五)、摂津国江口(五一二、九一八)、柱本(五一二)、播磨国竹の岡(三三三)、明石(三三六)、紀伊国根来(七七八)、伯耆国大山(七一二)、淡路国藤野の浦(四一七)、讃岐国みみ坂の社、白峯(一一七)、志度(五一〇)、筑紫国横川(四一四)がそうである。その他書承による説話では、大和国三輪(一一八)、外山(二二二)、山階寺松室(七一四)、相模大庭(七一三)、播磨国書写山(六一〇)、天竺の婆羅提寺(九一六)等がある。これらには、江口のように二度とも未知の地とされているものもあるが、木曾(七一四)、志賀(五一九)三輪(五一九)のように別の説話では既知の地名とされているものもある。この地名に対する意識のずれは、必ずしも初出のみを未知の地名とし、二度目からは既知の地名として出しているように思えない。

実際には、既知の地名としているものでも、巻第七第一四「北国修行時見人助」では、越の方へ修行した述主が、甲斐の白根、浅間のたけ、

信濃のほや、まのゝ渡瀬を経て、木曾のかけ橋を通り、かこの渡りから越中国に出たとする話なのだが、甲斐国から始まっているように、述主は関東から信濃へ入ったのであろう。すぐ前の第二三話の鹿嶋参詣の続きの旅とあるゆえんである。しかし、信濃国内のジグザグな旅程、特に一度浅間あたりまで行きながら木曾へ戻って越中へぬけたとする行程は、全く地理的状况を知らないと言えよう。木曾はこの説話では既知の地としているが、述主にとっても未知の地ではなかったのだろうか。

同様の例は、巻第三第一「見仏上人」にもみられる。能登国いなやつ郡で見仏上人と逢った述主西行は、さらに旅を続けて、帰りに同地を再び訪れたが、見仏上人の姿がみえなかったので、四日の行程を経て、見仏上人の居る松嶋に回り、そこで二月程暮したとする。見仏上人(月まつしまの聖)の居た寺は、奥州の松島寺であって、述主が見仏上人の居た寺を知らなかったのか、地理的認識が不足していたのかである。他にも細かい点を挙げていくと、佐野の渡を信濃としていたり、備前に細谷川があるとするなど、地理的認識の不足を示すものがみられる。

これらの『撰集抄』の地名のうち、道行文のように識されたものは殆ど歌枕なのであって、必ずしも地理的認識を必要とせず、想像の世界で、風景として意識されていればよかった地名であったのではないだろうか。

もう一点、地名に関して挙げておくと、述主の視点の問題がある。跋文によれば、『撰集抄』の撰述は、讃岐国善通寺でなされたことになっている。当然、述主が受手に対して語っているのも善通寺に於てであるは

ずだが、述主が讃岐国に自分を置いてそこから地理的な関係を語っているのは、前表35の巻第三第八「正直房被人仕」で、きびつ宮から東を向いているもののみであって、先に受手が未知であるように記述した例の中に、『撰集抄』における讃岐の地名が殆どあげられていた事とあわせて考えると、讃岐で撰述されたとはとうてい考えられない。

讃岐の地に述主が訪れたとする巻第一第七「新院御墓」も後半の保元の乱のあたりの記述をみると、「無由都に出て」とし、宇治の左府の死体を奈良京般若野ら堀おこした事を「承はりし」と伝聞にしているなど、都、奈良ではない地で語っているように思われる。また、巻第五第一五「作人形事」、巻第六第五「西山上人事」なども、高野を起点として記述しているし、巻第四第三「西道発心」、巻第五第七「西山僧事」などは京都を起点にしている。

このことが、『撰集抄』の撰述の過程にある年数を要し、その間の撰者の行動につれて述主の視点も移動した事を示すとは思えない。そうであるならば、巻第三第八話が最後に記述された説話ということになるのだが、先に前後の説話、第七「瞻西上人施女衣」と第九「貧俗遁世」があつて、その間にこれを後から入れる必然性は全くないのである。

## 五

如上、『撰集抄』では、そのすべての説話を述主の言葉で語るものと

『撰集抄』の成立過程

して構成されていること、その述主の行動は必ずしも整理されたものになつていないこと、述主の地理的認識は不正確であり語りの起点も一つではない事を論じて来た。

これらは一体何を意味するのであろうか。今野達氏は『撰集抄』の成立の基盤として、<sup>(11)</sup>

此の様な作品は、勿論ある個人の著作ではあるけれども、其の成立の背後には、多分にある階級的集团的社會の力が働いている事は否定出来ない。

とされ、

其の成立基盤に中世の聖階級の一種の文芸活動が考えられる。として、

大胆な作為仮構も、撰集抄作者の手かかる前に、或は一度は其等の人々によって為されたのかも知れぬ。と仮説をたてておられる。

まさしく『撰集抄』の成立には、先ず一つ一つの説話を語る場があつて、西行を理想の遁世者、回国修行をし、時に感動すれば歌をも詠む僧として、場合によってはその西行の行動を自らのものとして語る人々がいたのではないだろうか。先に論者は、『撰集抄』が説話を特定の時代に集約する傾向にあると論じたが、そうした虚構が成り立つのもまた、虚構を虚構として受容する場においてであらう。『撰集抄』はそうした語りの場の状況をそのまま移し留めたような作品であつて、述主はやは

り複数いたのであろう。そう考えれば、前述の諸点は複数の人間が、それぞれその起点に基づいて自らの持っている西行的な遁世者の説話を語った事を示す証左となろう。

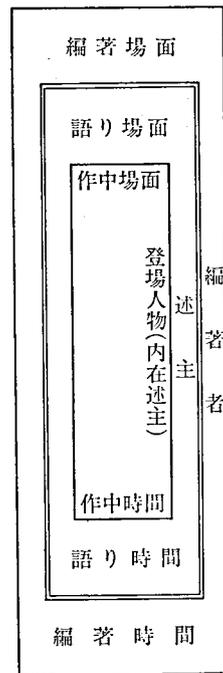
もし、特定の個人が、最初から虚構としての西行の見聞記を著そうとしたのであれば、前述のような内部の問題点を残して編纂するはずはないし、まして、後に別人が補入するとすれば、より内的矛盾を整合しようとするためであろう。

現存する『撰集抄』は、特定の個人の編述になる作品であるが、その成立の過程に存した語り場の存在を色濃く残している。それがどんな人達によってどこでなされたのかは明らかにし得ない。今野氏の言われる高野を中心とした念仏聖達であろうか。ただ、西行を語った人々は、往生をそれ程切迫した自らの課題と考えておらず、どこかに隠者的なゆとりさえ持って、歌枕や和歌を取り込んだ道行文に感動するような人々であったとは言えよう。

註

- (1) 西尾光一編『撰集抄』八松平文庫本V、昭和五二年、古典文庫による。以下『撰集抄』はすべて同書によったが、一部私に句読点をうったところもある。
- (2) 『発心集』の現行本には、長明以外の人の手も入っているとの説がある。しかし、『発心集』が最初長明の手に成ったことは確かであるし、その撰述の目的も、表面上は序、跋に記されたように受け取れる。

- (3) 「昔・中比・近比と過ぎにし比など——『撰集抄』の述主と作中時間——」(『説話』第四号、昭和四十七年、説話研究会、所収)に犬井氏は次のように図式化されている。



この二重線の内側が話の一まとまりの単位で、これらがいくつか集まって集としての『撰集抄』ができ上っているとされる。

- (5) 説話の後半に述主が、笹の岩屋を訪れ詠歌を残した事が記されているが、必ずしも行尊の事はその地で知ったのではなく、それを知ってその地に行ったとも思われるので、以下の検討の対象からははずした。

- (6) 実際には匡房の『統本朝往生伝』には載っていない。以下の『遊心集』等も佚書であったりして、説話の比較はしていない。

- (7) 美濃部重克校注『閑居友』、昭和四九年、三弥井書店、引用部分は上・一六八ページ

- (8) 『撰集抄』に関する研究の総体は、安田孝子・梅野きみ子・野崎典子・河野啓子・森瀬代士校編『撰集抄——松平文庫本——』、昭和五五年、笠間書院、の602ページ「撰集抄」関係文献目録」に詳しい。

- (9) 統群書類従本(第三十二輯上)による。

- (10) 『撰集抄』における歌枕については、下西善三郎氏の「『撰集抄』に於ける美文の問題」(『金沢大学国語国文』第七号、昭和五五年)や、木下資一氏の「虚像西行の旅をめぐって——『西行物語』から『撰集抄』へ——

(11) (昭和五十七年度中世文学会春季大会、口頭発表)の御論がある。  
「撰集抄の成立について——その年次と性格——」(『国語国文』第二十五卷第十二号、昭和三十一年)

他に、『撰集抄』の成立の背景を同様に仮説されたものとして、青木晃氏の「西行説話の其本構想——『撰集抄』から『西行物語』へ——」(『国文学』No.54、昭和五二年、関西大学国文学会)がある。

(12) 「撰集抄」における源経信」(『文学部紀要』第十五卷第三号、昭和五五年、中京大学学術研究会)